

Ocean Breeze

Newsletter of the Atmosphere and Ocean Research Institute
The University of Tokyo

2014
第17号

特集

WESTPAC 25周年を迎えて

報告

電子本 "Western Pacific Air-Sea interaction Study" が刊行される
大槌湾から世界の海へ! ~ちょっと魅せます海の最先端研究~

放課後の大海研③

大気海洋研究所テニスクラブ

研究人生よもやま話⑩

研究船お国柄

書き手自身による新刊紹介

環境と微生物の事典

海洋地球化学

人事異動一覧/受賞/新スタッフ紹介
イベントレポート/AORIスタッフ目録



2001年、英国船での研究航海にて



道田教授がOutstanding Scientists 2014受賞



岩手県大槌町でイベント開催



大海研テニスクラブ ダブルステニス大会 (西脇杯)



WESTPAC 25周年を迎えて

道田教授が Outstanding Scientists 2014を受賞

国際連携研究センター教授 国際沿岸海洋研究センター兼務 道田 豊

インタビュアー：海洋大循環分野 助教 柳本 大吾

—このたびはWESTPAC (IOC Sub-Commission for the Western Pacific: ユネスコ政府間海洋学委員会西太平洋小委員会) 25周年記念大会でのOutstanding Scientists 2014の受賞おめでとうございます。

道田：ありがとうございます。今年はWESTPACがIOC (Intergovernmental Oceanographic Commission: ユネスコ政府間海洋学委員会)の地域委員会からサブコミッション(Sub-Commission:小委員会)に昇格してから25周年にあたり、その記念のシンポジウムが4月22～25日にベトナムのニャチャンで開かれました。この機会にこれまでの貢献者を表彰しようということになり、今回5人表彰されたうちの1人に選んでいただきました。

今回の受賞は、“サブコミッション発足前

から、地域の海洋研究の発展のため、研究面のみならずプログラム運営面でも継続的に貢献し、WESTPACに多大な寄与があったことに対する表彰”とのことでした。

—海洋系の研究者を除き、一般の方はWESTPACについて、ご存知ないかもしれません。

道田：サブコミッションになったのは1989年ですが、WESTPACという名称がついた1977年が活動のスタートラインですね。しかし、それ以前にCSK (Co-operative Study of the Kuroshio and Adjacent Regions: 黒潮および隣接海域共同研究)



机にあるのは受賞時(左下写真)に授与された表彰プレート

が1965年から1979年にかけて、IOCの地域プロジェクトとして活動を続け、そこで成果が上がって恒久的なプログラムになったのがWESTPACというわけです。

長年の活動の成果が認められてサブコミッションに昇格し、現在に至ります。IOCのサブコミッションは、カリブ海 (IOCARIBE)、西太平洋地域のWESTPAC、そしてアフリカ (IOCAFRICA)、この3つしかありません。

恒久計画のWESTPACがスタートする前に東南アジア諸国も加わり、現在WESTPACには21カ国が参加しています。今後、インド洋と太平洋の関係も大事なテーマになるので、インドの参加も期待されると思います。

—WESTPACの活動は、今後も拡張していくわけですね。

道田：IOCの中では、今までの活動や運営が最も成功している地域計画として、評価



25周年記念シンポジウムでの表彰式にて(左から2人目。左端は同時受賞の福代康夫・東京大学名誉教授)



1985年2月、WESTPAC航海で甲板作業

を得ています。

—現在、IOCの副議長もなさっていますが、WESTPACとの関係は。

道田：2011年にIOCの副議長に選ばれましたが、私は地域代表でもあり、おもな地域計画の一つがWESTPACなので、IOCとWESTPACとの連携を図っています。

学生時代から始まった WESTPACとの関わり

—WESTPACに関係する先生の研究と云えば、タイでおこなった漂流ブイの放流実験がありますが、WESTPACの研究領域に関わるようになったのはいつ頃でしょうか。

道田：博士課程1年の時、白鳳丸で初めて太平洋地域へ観測に出ました。遡ればそこからですね。その後、海上保安庁に所属していた1985年には、赤道まで観測航海に出ました。この辺りがWESTPACとの関わり初期です。

2001年から2010年までは、東南アジア5カ国の共同プロジェクトが進行していて、タイランド湾の北部で湾内の循環とクロロフィル濃度(植物プランクトン量の指標)の関係性を調べるため海流調査用漂流ブイを流し、その位置を追跡して循環の経路を観測していました。これを年に2、3回おこな



2008年、マレーシア・コタキナバルで行われた第7回科学シンポジウム開会式

い、タイの研究者が循環モデルを作り、何年かに亘って観測した成果を2008年にマレーシアのコタキナバルでおこなわれたWESTPACのシンポジウムで発表しました。これはまさにWESTPACの研究成果ですね。

—タイでおこなったのにはどんな理由が。

道田：共同プロジェクトの5カ国のうち、物理系の研究体制が整っていたのがタイだったんですね。すでにタイには循環モデルがありましたが観測結果がなくて検証できていませんでした。タイには観測に使える80トンほどの船があったことも大きな要因ですね。

ワークショップ形式で トレーニングコースを提供し人材育成

—WESTPACは、人材育成も目的として掲げていますね。

道田：今回共に受賞した福代康夫先生(東京大学名誉教授)は20年以上にわたって多くのトレーニングコースやワークショップを運営されていて、東南アジアのハブになるような研究者をたくさん育てています。また、WESTPACのデータ管理研修コースでは、海洋データ管理の技術やノウハウを伝え、ここで学んだ人材が海洋観測に関

するデータセンター等で中堅技術者になっています。大海研でも、行動生態計測分野の小松輝久先生が「衛星リモートセンシングによるハビタットマッピング」*に関する研究やトレーニングコース運営に取り組んでいます。

トレーニングセンターと言ってもどこかに建物を構えるのではなく、例えば大海研が1、2ヵ月のトレーニングコースを設定して毎年ワークショップを開催し、それを長年に亘って継続するような取り組みです。このようなバーチャルなトレーニングコースをネットワーク化して、WESTPAC全体の調査研究能力を上げようとしています。

—WESTPACの活動は、現在に至るまで順調だったのでしょうか。

道田：2000年代に入って一時期、WESTPACの目指すべきところを見失いそうになった時期がありましたね。恒久的なプロジェクトとなった反面、各国の取り組みの方向性がわからなくなってきたので、5年のスパンを設定し「ここ5年間で大事なプロジェクトは何か」を明確にして、そこに注力するよう体制を変えたのです。今は、WESTPACの現在のターゲット4つ—自然災害、気候変動、海洋生態系の健全性、能力開発—が明確に示されていて、それを実行するための研究プロジェクトが各々進

行しています。

このような体制になって最初に始まったプロジェクトの完了時期が近づいていますが、次の研究計画を策定するワーキンググループがすでに動いていて、次のテーマが提案されるものと思われます。プロジェクトの成果に対する評価は、まず各国から選出されたメンバーによるアドバイザーグループでおこない、その評価をもとに正式な会議で承認することになっています。一時期停滞していたWESTPACの活動も、プロジェクトの評価システムの整備などで今は活性化されていますね。

—体制と言えば、1994年以降、タイのバンコクで事務局が20年も維持されている意義は大きいですよ。

道田: このように規模の大きい国際プロジェクトだと、事務局を維持し続けるのはとても難しいことです。もともとタイは国の方針で、主な研究の一つとして海洋学に取り組んでおり、WESTPACの事務局を誘致することも国が決定したんですね。以来20年、我々はタイの協力を非常に感謝しています。

今後ますます求められる 国際的な調整力

—WESTPACのミッションは、設立時と今とでは何か変化がありますか。

道田: 基本的なところは変わっていません。しかし、以前はピュアサイエンス—自然科学に関するテーマが多かったのですが、近年はより役に立つ海洋学を志向するようになってきました。WESTPACはIOCの下にあるので政府間の小委員会ですよ。各国のメンバーは、国の施策に基づいた海洋の管理や開発、環境保全など、役に立つテーマを自分たちの仕事と捉える意識が変わってきています。それが徐々に強くなってきていると言えます。

多国間で海洋の研究をやるとなると、いろいろな調整が難しい時代になっていますが、“WESTPACの枠組みをうまく使ってサイエンスに取り組む”という協同ができるといいですよ。

例えば、我々の喫緊の課題として日本海の底層水温上昇があります。おそらく気候

変動の影響が日本海に表れているのですね。日本海は入口が狭くて浅く、一方、真ん中が深くなっています。表層の海水はどんどん入れ替わっても、底層の海水は表層ほどの流動はないため、冬に十分海水温が下がらなければ底層はどんどん温まってしまうのです。

ニュースで報道があったように、リュウグウノツカイなどの深海魚が海面近くまで浮上しているのもその影響ではないかとも言われています。海洋生態系に影響が出ているわけですね。この状況を検証するためには、日本の海域だけではなく、ロシア海域内も観測しなければなりません。WESTPACにおける多国間で協力する枠組みを使って、これから10年ぐらい観測することができれば、大きな成果になると思います。

このように、WESTPACは研究だけではなく、国際的な調整をおこなうことも重要な要素で、今後はよりその能力が要求されるでしょう。そのような役割を担う人材も育てていきたいですね。

* 衛星リモートセンシングによるハビタットマッピング: リモートセンシングの広域観測特性を生かして、沿岸の海洋生態系やそれを支える環境条件などの分布を把握しようというもの



2005年7月、タイランド湾の観測。タイの研究者らと集合写真(前列、左から2人目)

西太平洋小委員会 (WESTPAC)

WESTPACは、ユネスコ政府間海洋学委員会 (Intergovernmental Oceanographic Commission: IOC) に3つある小委員会の一つで、1979年に発足しました。西太平洋海域の総合的な海洋研究を推進し、海洋に関する地域の能力を向上させることを目的として、21カ国が参加しています。1989年にそれまでの地域委員会から小委員会に格上げとなり、今年(2014年)は小委員会設置から25年の記念の年にあたります。さらにWESTPAC前史として、1960年代から70年代にかけて行われた黒潮及び隣接海域共同研究 (Cooperative Study on the Kuroshio: CSK) の成功を忘れてはなりません。日本の主導で開始さ

●WESTPAC科学シンポジウム

回	年月日	開催場所
1	12/1-6, 1986	オーストラリア, タウンズビル
2	12/2-6, 1991	マレーシア, ベナン
3	11/22-26, 1994	インドネシア, バリ
4	2/2-7, 1998	日本, 沖縄
5	8/27-31, 2001	韓国, ソウル
6	4/19-23, 2004	中国, 杭州
7	5/21-25, 2008	マレーシア, コタキナバル
8	3/28-31, 2011	韓国, 釜山
9	4/22-25, 2014	ベトナム, ニャチャン



2005年、第6回政府間会合日本代表団(後列右端、道田教授)



2010年、バリ島で開催された第8回政府間会合(左端、道田教授)

れたCSKは、IOC初期における国際研究プロジェクトの成功例として知られ、これを発展的に解消して始まったWESTPACも含め、わが国の研究者が重要な役割を果たしてきています。当研究所も、根本敬久、平啓介の元所長がWESTPACの議長を務めたほか、研究プロジェクトの推進、研修生の受け入れなどの貢献を行っています。現在の議長はSomkiat Khokiattiwong博士(タイ)、副議長はYeon-Ho Lee博士(韓)とVo Si Tuan博士(ベトナム)の二人です。事務局はバンコクにあり、事

務所経費等はタイ政府が支援しています。Wenxi Zhu事務局長の指揮のもとでタイ人の事務局員数名の体制となっています。

2014年現在、「海洋リモートセンシング」「有害藻類*」など9つの研究プロジェクト、研究計画の策定などのため4つのワーキンググループ、世界海洋観測システム(GOOS)の地域コンポーネントを担う海洋サービスプログラム、各種研修などが幅広く進められており、IOCの地域活動の中で最も活発であると評価されています。WESTPAC参加国の政府間の話し合いを行う総会、主として研究の科学的成果を報告する科学シンポジウムが、それぞれ2~4年に1度開催されています。2014年4月にベトナムのニャチャンで行われた第9回WESTPAC国際科学シンポジウムは500人を超える参加者を数えました。回を重ねるたびに参加者数が増加しており、WESTPACおよび地域の海洋研究の活力を示していると言えるでしょう。

*有害藻類: 貝毒などの原因物質を生成するような植物プランクトン

電子本 “Western Pacific Air-Sea interaction Study”が刊行される

Ocean Breeze 2011年秋、第6号で紹介されました特定領域研究「海洋表層・大気下層間の物質循環リンケージ：W-PASS」(2006-2010)の成果を国際的にも広く知ってもらおうと、英語版を無料でダウンロードできるOpen Accessのe-Libraryの一冊として刊行しました。

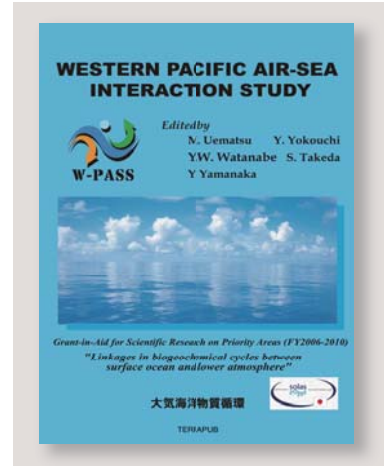
本の内容は「大気組成動態」、「気体交換変動」、「海洋生態系動態」、これらの物質循環過程を統合する「統合モデリング」の4項目で計20編の英語論文と600編近い査読公表論文リストを一冊に収めています。それぞれの論文が個別にダウンロードできるようにしました。

このW-PASSプロジェクトでは、大気化学、海洋化学、海洋生物学、海洋物理学、海洋気象学などの多岐にわたる分野の29機関、89名の研究者が、海洋大気境界層から境界面を通じた海洋表層を研究対象として、新しい領域を確立し、31名の修士、12名の博士修了者を輩出したことに高い評価をいただきました。

この成果はIGBPのSOLASコアプロジェクトへの日本の国際貢献となります。

(植松 光夫)

Uematsu, M., Yokouchi, Y., Watanabe, Y. W., Takeda, S. and Yamanaka, Y. (eds.) (2014) Western Pacific Air-Sea Interaction Study. TERRAPUB, 284 pp.
<http://www.terrpub.co.jp/e-library/w-pass/index.html>



「大槌湾から世界の海へ！ ～ちょっと魅せます海の最先端研究～」

7月30日から8月3日まで、大槌町のショッピングセンター「マスト」にて東北マリンサイエンス拠点形成事業(プロジェクトランメーユ)と国際沿岸海洋研究センターの共催による「大槌湾から世界



AORIハッピーで来場者をお出迎え

の海へ！～ちょっと魅せます海の最先端研究～」を開催しました。沿岸センターの最新研究や、東北マリンサイエンスの活動を紹介します。ポスター展示を5日間にわたって行い、8月2日と3日には特別企画も行いました。煮干しの解剖や砂の中の生き物探

し、貝殻の断面観察などの体験コーナーは子どもたちを始めさまざまな年齢層の方に大人気で、顕微鏡を覗いた人の驚きの声が印象的でした。「大槌湾のサケの生態について」の講演会をめぐらせてくださった方の姿も見られ、ポスター



真剣に煮干しの解剖に取り組む子供たち

の前でもたくさんの方が足を止めて熱心に見ていただきました。ショッピングセンターでの広報イベントという初めての企画でしたが、大槌で行われている研究について地元の方に知っていただく良い機会となりました。(杉原 奈央子)

放課後の 大海研③

大気海洋研究所

テニスクラブ

大気海洋研究所テニスクラブは、数十名の会員が所属しており、テニス歴が40年近いベテランから、ここでテニスを始めた方、他の競技と掛け持ちしている方などバラエティに富んだ集団です。暑い夏は涼しい顔で、寒い冬は熱い気持ちで日々テニスに取り組んでいます。身分も分野も関係なく、“テニス仲間”として一緒にわいわい楽しめる点が大きな魅力です。

普段は、平日の昼休みや夕方を中心に、新領域創成科学研究科のテニスコートをお借りし、練習・試合を行っています。また、日頃の成果を発揮する場として、テニスクラブ内での大会や、柏キャンパス内の他のテニスチームとの団体戦など、“アツイ”イベントも行っています。

先日7月12日(土)には、旧海洋研究所が柏キャンパスに移転してから二度目となる、ダブルステニス大会(西脇杯)を、大気海洋研究所厚生委員会の後援のもと開催しました。西脇杯は、旧海洋研究所の第4代所長の西脇昌治教授によって1975年に始められた伝統あるダブルスの大会で、今回が第32回目でした。台風の接近と開催日が重なり、天気予報を冷や冷やしながら眺めていましたが、蓋を開けてみると台風一過の快晴、コートに立っているだけで汗が止まらない、非常にタフな一日でした。優勝は、木暮一啓(微生物分野)・伊藤純至(海洋大気力学分野)組、準優勝は、大森弘光(国際沿岸海洋研究センター)・小林英貴(海洋システムモデリング研究分野)組、3位は、新野宏(所長)・川崎高雄(海洋システムモデリング研究分



優勝した木暮一啓(微生物分野)・伊藤純至(海洋大気力学分野)組

野)組でした。テニスをした後にはもちろん、お楽しみのビール。昼間の疲れが吹き飛ばす瞬間でした。

所内のテニス大会は、他にもシングルス大会(丸茂杯)があります。2008年以来開催を中断していることから、今後復活させ、西脇杯とともに毎年開催していきたいと思えます。

私自身、高校の部活から硬式テニスを続けていますが、これまでとは違った“大人のテニス”、つまり、見た目の派手さ、豪快さや強力なショットに拘らず、結果として“勝つテニス”の習得を目指して努力しています。クラブ内の試合でも、攻めているつもりが絶妙なコースに返球され、気がついたら負けていたという経験が多々あります。諸先輩のテニスをお手本にしながら、少しずつ“大人”になっている自分の成長を感じています。

いかがでしょう、みなさまもテニスがやりたくなくなってきませんでしたか。ラケットをまだ握ったことがない初心者の方を含め、どなたさまも遠慮されることなくどんどんご参加ください。テニスのあるAORIライフを始めてみませんか。(小林 英貴)



台風一過の快晴の空の下、ダブルステニス大会(西脇杯)開催



夕暮れ迫るコートで、大会参加者全員集合

研究船お国柄

沖野 郷子 海洋底科学部門海洋底地質学分野 教授

大気海洋研究所の研究者たちが自らの研究生活について、反省談、失敗談、今だから言える話、などなどを後進に資することを期して語ります。

私はこれまで海外の研究機関に長期滞在した経験はないのだが、外国の研究船には何度か乗船する機会があった。日本の研究船で育てられて日本の船の習慣をあたりまえのように感じてきた身には、観測作業の手順から船上生活のしきたりに至るまで、それぞれお国柄があることがわかって大変おもしろい。

さまざまな違いのなかでも、もっともお国柄が出て、かつ長い船上生活で重きを占めるのが食事である。日本の普通の研究船の場合は、朝・昼・夕ときちんと決まった時間に、原則みな定食のような形のものを食べる。時間に遅れると、あまりいい顔をされない。昼食には果物とかアイスクリームといったデザート的なものがつくことがあるが、そのほかアルコール含め嗜好品類は船からは提供されない。

フランスの大型船に乗ったときは、朝は並んでいるパンや果物やヨーグルトを勝手に好きなようにとるスタイル、昼食・夕食はサービス専任の人が一皿ごとを持ってきた。紙パックのものだがテーブルワインもつく。昼食にはけっこう手の込んだデザートが付き(もう最高!)、夕食の最後はチーズのお盆が回る(必死にチーズの種類フランス語を覚えた)。さらに、船内

にバーがあつてごく安い値段でお酒が提供される。当直以外はみな夕食の30分前にバーにいて食前に一杯飲むと食事の鐘がなって食堂にぞろぞろ移動する感じ。

イギリス船は、セルフサービス・カフェテリア式だった。3食とも2時間ずつの時間設定があつて、その時間内の好きな時間について好きなものを取って食べる。昼食は20種類くらいのホットメニューのリストがあつて、何番お願い、というと冷凍のグラタンをオープンに入れてくれたり、その場で肉を焼いてくれたりする(でも正直いって味はいまいち)。こちらも船内バーがあるが、食前に行く習慣はあまりないようで夜と日曜の昼に営業。いちばんの楽しみは、午後3時ごろに給湯室にいくと毎日焼きたてのスコーンとかクッキーが置いてあること。研究室の話題も「今日のおやつは何か」。

台湾の船は、スタイルとしては日本に近かったけれど、厨房には例の

切り株みたいなまな板がどんと置いてあつた。おかゆがおいしかったなあ。ロシア船の料理は油・油・油で野菜がどんどんなくなってつらかつた。肉と芋の横に薄切りキュウリが2枚ぺらつとのっていたのを思い出す。3食以外におやつ時間があつて、ピロシキとかゆで卵とかずいぶん腹持ちのするものが出た。

私の師匠は外国の航海に参加することを「プチ留学」と呼んで私に勧めたのだが、まさにその通り。食事ひとつとっても文化や考え方の違いが見えてくる。機会があればみなさん是非乗船してみしてほしい。ちなみに食べもの関係ではないけれど一番びっくりしたのは、ロシア船に猫が乗っていたことだな。



英国船でロックチッパー(岩石採取装置)を準備する30代の私



ロシア船で真剣に猫をじゃらす故 玉木教授

人事異動一覧

*H.26.4~H.26.8

□ 教員(常勤)

発令日	氏名	異動内容	所属・職名	(旧)所属・職名
H26.7.1	伊藤 進一	採用	海洋生物資源部門 環境動態分野 教授	
H26.7.16	沖野 郷子	昇任	海洋底科学部門 海洋底地質学分野 教授	海洋底科学部門 海洋底地球物理学分野 准教授

□ 職員(常勤)

発令日	氏名	異動内容	所属・新職名	(旧)所属・職名
H26.7.1	黒須 玲子	転出(昇任)	先端科学技術研究センター-財務企画チーム(プロジェクト執行室) 係長	財務チーム 主任
H26.7.1	澁谷 弘毅	転入(配置換)	財務チーム	係長 医科学研究所病院課病院会計チーム 係長

□ 特定有期雇用教職員

発令日	氏名	異動内容	所属・新職名(兼務職名・所属)	(旧)所属・職名
H26.4.30	沢田 雅洋	退職		地球表層圏変動研究センター 大気海洋系変動分野 特任助教
H26.7.1	新田 友子	採用	気候システム研究系 特任研究員	
H26.7.1	吉兼 隆生	採用	気候システム研究系 特任研究員	
H26.8.1	宮川 知己	採用	気候システム研究系 特任助教	
H26.8.1	森 正人	職名変更	気候システム研究系 特任助教	気候システム研究系 特任研究員

□ 短時間有期雇用教職員

発令日	氏名	異動内容	所属・職名	(旧)所属・職名
H26.4.5	稲川 浩美	退職		海洋生態系動態部門 微生物分野 事務補佐員
H26.4.30	稲葉 和美	転出(配置換)	本部総合企画部総務課総務チーム 一般職員	経理・調達チーム 事務補佐員
H26.4.30	近藤 晴奈	退職		気候システム研究系 技術補佐員
H26.5.31	田中 智子	退職		気候モデリング研究部門 気候システムモデリング研究分野 技術補佐員
H26.6.30	野村 英明	退職	海洋アライアンス(理学系研究科) 特任助教	海洋生態系動態部門 微生物分野 特任研究員
H26.7.31	北島 靖子	退職		経理・調達チーム 事務補佐員
H26.7.31	宮城 久美	退職		気候システム研究系 事務補佐員
H26.5.1	Attachai Kantachumpoo	採用	海洋生命科学部門 行動生態計測分野 特任研究員	
H26.5.1	荒川 恭子	採用	気候モデリング研究部門 気候システムモデリング研究分野 技術補佐員	
H26.5.1	北小路 雪子	採用	気候システム研究系 技術補佐員	
H26.8.1	AZIMUDDIN KAZI MD	採用	海洋生態系動態部門 微生物分野 特任研究員	
H26.8.1	小関 玲子	採用	気候システム研究系 事務補佐員	
H26.8.1	坂巻 みゆき	採用	経理・調達チーム 事務補佐員	

□ 外国人客員教員

委嘱期間	氏名	所属・職名	本務先・職名
H26.5.1~H26.6.30	DHAKA, Surendra Kumar	気候システム研究系 招へい准教授	デリー大学ラジャニ校 准教授
H26.6.1~H26.9.30	PINTI, Daniele Luigi	海洋地球システム研究系 客員教授	ケベック大学モントリオール校 教授
H26.7.1~H26.12.31	WEI, Ke	気候システム研究系 客員准教授	中国科学院大気物理研究所モンスーンシステム研究センター 准教授
H26.7.1~H26.8.31	LI, Yuan-you	海洋地球システム研究系 招へい教授	汕頭大学 教授

新スタッフ紹介

2014年4月に着任したスタッフを紹介します。

①氏名、②所属、③こんな仕事をしています、④ひとこと



- ①齊藤 宏明(さいとう ひろあき)
- ②海洋生態系動態部門 浮遊生物分野
- ③生物活動(栄養塩取り込み、有機物合成、摂餌、遊泳等)とその変動が、生態系の構造や生物量に及ぼす影響と、炭素、窒素、リン、ケイ素等生元素循環に果たす役割を調べています。対象はプランクトンが中心ですが、魚類や人間活動も含めて研究しています。

④友達や家族と、おいしいお酒を飲みながらおいしい料理を食べることを楽しんでます。最近は美術館巡りと、イタリアングレイハウンドの愛犬Rossoの散歩でリフレッシュしています。



- ①杉田 佳代子(すぎた かよこ)
- ②副事務長(総務担当)
- ③事務部の総務、国際・研究推進、図書チーム、国際沿岸海洋研究センター事務室の総括を担当しています。業務内容が幅広く、また、大海研独自の事情が関係する場合がありますが、それぞれが業務において活躍している担当チームのメンバーに囲まれて心強い限ります。

④これまで経験した部局は、学部・研究科でしたので、研究所という新たな職場で緊張する一方、今までの仕事との違う点を楽しみにもしています。大海研の皆さまのお役に立てるように努力したいと思います。



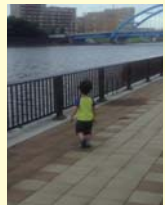
- ①古川 穂子(ふるかわ としこ)
- ②国際・研究推進チーム
- ③主に柏と大槌の共同利用を担当しています。具体的には公募要領の作成・発送、申込書の取りまとめや関係する会議の庶務、共同利用で来所する研究者の旅費の申請手続きなどです。その他、共同利用・共同教育研究拠点に関する各種の調査物なども担当しています。

④4月に農学系総務課から参りました。柏に住なので通勤が楽になって喜んでます。家庭菜園で色々な野菜を育てていて、季節ごとの収穫を楽しんでいます(夏は枝豆!)。今後ともどうぞよろしくお願いたします。



- ①坂牧 一博(さかまき かずひろ)
- ②図書チーム係長
- ③研究室から依頼のあった図書の発注、受入、図書館OPAC(所蔵データベース)への登録、資料を電子化してリポジトリへの搭載の手続き、書架の狭隘化のために除籍処理など。最近では、理系女子イベントや講習会の開催に関わっております。

④子供の遊びをテーマにしたNPOの行事に参加しています。子供たちの感性に驚き、感動を共有し、わくわく☆どきどきを楽しんでおります。皆様のお役にたてるよう頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。



- ①阿瀬 貴博(あぜ たかひろ)
- ②共同利用共同研究推進センター陸上研究推進室(技術職員)
- ③主に加速器実験施設と地学精密分析実験施設にて各分析装置の維持管理を担当しております。どちら

も大きな枠組では質量分析装置と呼ばれるもので、微量な元素や同位体を分析しております。

④4月の着任を機に、18年間住んでいた川崎市多摩区から東京都荒川区に引っ越しました。週末に子どもと近所を散策するのが最近の楽しみになっています。



- ①芦田 将成(あしだ まさなり)
- ②共同利用共同研究推進センター観測研究推進室
- ③学術研究船白鳳丸、新青丸に乗船し海洋

観測機器の運用や観測支援を行っております。また、陸上では観測機器棟において海洋観測機器の保守管理等を行っております。主に地質系の観測機器を担当させていただく予定です。

④趣味:ラケットを使うスポーツ(テニス、バドミントン、卓球)昨年度までは一般企業に勤めており、海山川等の調査をしておりました。皆様のお役に立てるよう頑張りますので、何卒宜しくお願い致します。



- ①鈴木 貴悟(すずき たかのり)
- ②国際沿岸海洋研究センター技術職員
- ③船舶の保守・整備・操船や観測機器の取り扱い、設置

物の制作など様々な仕事をしています。私は初めての仕事も多く、観測の内容に対応できる知識と技術を学ぶのも大切な仕事の一つです。

④先輩方のご指導の下、これからも向上心を持ち頑張りたいと思います。



中島 映至 教授
2014年度 日本気象学会 藤原賞
[2014年5月]

- 受賞題目
「大気放射学とそれに関わる気候・環境科学の推進」



阿部 彩子 准教授
2014年度 日本気象学会 日本気象学会賞
[2014年5月]

- 受賞題目
「氷期・間氷期サイクルの機構解明に関する研究」

森 正人 特任助教(受賞時は特任研究員)
2013年 日本気象学会 気象集誌論文賞
[2014年5月]

- 受賞論文
「MIROC による CMIP5 近未来予測実験を用いた北西太平洋における熱帯低気圧活動の過去・近未来予測」

阿部 彩子 准教授
2013年度地球環境史学会貢献賞
[2014年5月]

- 受賞題目
「氷期・間氷期サイクルの変動メカニズムと古気候モデリングの推進」

坂下 涉 高解像度環境解析研究センター
環境解析分野 博士課程
日本地球惑星科学連合2014年大会 学生優秀発表賞 [2014年5月]

- 受賞題目
「マウンダー極小期の太陽磁場サイクルに対する中部日本・台湾の気候応答」

ベル 智子 高解像度環境解析研究センター
環境解析分野 博士課程
日本地球惑星科学連合2014年大会 学生優秀発表賞 [2014年5月]

- 受賞題目
「地球化学とゲノム生物学を繋げるためのコピミドリイシサンゴを使った研究」

藤井 昌和 海洋底科学部門 海洋底地球物理学分野 博士課程
日本地球惑星科学連合2014年大会 学生優秀発表賞 [2014年5月]

- 受賞題目
「中央インド洋海嶺ヨコニワ熱水域における高磁化帯の起源」



左から、藤井、坂下、ベル

広瀬 雅人 特任助教
日本動物分類学会 奨励賞 [2014年6月]

- 受賞題目
「コケムシを始めとした触手冠動物の分類学的研究」



広瀬特任助教(右)

桂 将太 海洋物理学部門 海洋大循環分野 博士課程
AOGS(アジア・オセアニア地球惑星科学会) 2014年大会 学生ポスター賞 [2014年8月]

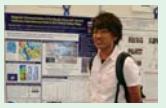
- 受賞題目
「Formation Mechanism of Barrier Layer in the Subtropical Pacific Revisited Using Argo Profiling Float Data」



桂(左)

藤井 昌和 海洋底科学部門 海洋底地球物理学分野 博士課程
AOGS(アジア・オセアニア地球惑星科学会) 2014年大会 学生ポスター賞 [2014年8月]

- 受賞題目
「Magnetic Characterization of the Basalt-Ultramafic Hosted Yokonawa Hydrothermal Field in the Central Indian Ridge」



中村 祐貴 海洋底科学部門 海洋底地質学分野 博士課程
AOGS(アジア・オセアニア地球惑星科学会) 2014年大会 学生ポスター賞 [2014年8月]

- 受賞題目
「Attribute Analyses of Large-scale Submarine Landslide in the 3D Seismic Data Off Shimokita Peninsula, Northeast Japan」



Event Report

イベントレポート

■ 新入生歓迎会

2014年4月18日(金)、新しく大気海洋研究所にきた方々を迎える新入生歓迎会が開催されました。今年は会当日、新野所長がご不在ということで、(おそらく)大気海洋研史上初のビデオレターによる所長挨拶により開幕しました。「はま」に準備してもらったお寿司とお酒を楽しみながら、新入生自己紹介やサークル紹介が行われ、終始よい雰囲気の中会を終了することができ、準備を進めた修士2年一同ほっとしたところでありました。(三輪 一爾)

■ 進学ガイダンス

2014年5月10日(土)午後1時より、大学院進学希望者を対象とした進学ガイダンスが開催されました。講堂にて研究所紹介と大



熱のこもったサークル紹介に聞き入る参加者

学院入試案内を行ったあと、会場を会議室と講義室に移し、パネルを用いた研究室紹介となりました。3時から各研究室の訪問タイムで、来所学生と所員の交流が

続きました。例年より1ヶ月早い開催でしたが、参加者数は32大学からの65名とほぼ変化ありませんでした。この中から多くの方が入所されるよう期待しています。(狩野 泰則)



「柏キャンパスin駒場」のフォーラム終了後、参加者全員で記念撮影

■ 柏キャンパスin駒場

柏キャンパスの部局長自らが駒場キャンパスに赴くこのイベントの第3回が、2014年6月21日(土)に開催されました。豪華な講演陣に対して参加者が少ないのは毎回悩みの種ですが、そんな中やってくる学生たちがみな質問等に積極的なのも毎回のことです。主対象は学部1・2年生ですが、中には高校1年生もいました。今回は大気海洋に興味を持つ学生とじっくり話すことができ、昨年よりは個人的に満足できました。(羽角 博康)



各分野のパネルの前で活発な質疑応答が交わされました



横山准教授の講義に熱心に耳を傾けるご参加の皆様



終了後の懇親会にて

地球表層圏変動研究センター 主催サイエンスカフェ

2014年6月27日(金)本郷キャンパス山上会館にて、地球表層圏変動研究センター主催のサイエンスカフェが開催されました。センター長の中島映至教授をホスト講師、横山祐典准教授をゲスト講師に迎え、古環境に関する最新の科学が披露されました。質疑応答も活発に行われ、盛況のうちに幕を閉じました。

講義と懇談会の形式で、研究者の人となりと研究内容を、広く一般の方々に身近に感

じて頂くために企画したこのイベントも、今回5回目となります。回を重ねるごとに皆様の意識と関心の高さを改めて感じ入るところです。「とても楽しかった」「ぜひまた参加したい」という言葉を多く頂戴し、確かな手応えを感じています。(小出 庸子)

気候システム研究系 一般公開講座

気候システム研究系では、2014年7月14日に「気候研究のいま」と題した一般公開講座を東京大学本郷キャンパスの伊藤謝恩ホールで開催しました。3名の気候システム

研究系教員が講演を行いました。はじめに、芳村圭准教授が「気候と地球水循環」について、続いて、岡頭准教授が「海の大循環」について、そして最後に阿部彩子准教授が「氷期の謎に挑む」と題して、それぞれ最新の成果も盛り込みながら、また互いの話題の間の関連にも触れながら話され、例年にも増して説得力のある講演会となりました。月曜日の開催でしたが、230名の参加を頂きました。講座終了後は、気候システム研究系のOB会である気候友の会の懇親会も開かれ、松野太郎元気候システム研究センター長や畚野信義元客員講座教授のご参加も得て、旧交を温めました。(木本 昌秀)



会場にて。手前から岡頭教授、芳村准教授、阿部准教授



講演会冒頭で挨拶する司会の木本教授

AORI スタッフ日誌 ⑬

東北マリンサイエンス拠点形成事業・プロジェクト・事務局

大気海洋研究所には、教育研究活動を支援するさまざまな職種のスタッフが勤務しています。このコーナーでは、スタッフの仕事を通じて、研究所の活動を別の角度から紹介します。

2012年1月に始まった東北マリンサイエンス拠点形成事業(TEAMS)は、東北地方太平洋沖地震とそれにとまなう津波で被害を受けた東北の海で10年間にわたって科学的調査を行い、漁業等の復興に貢献することを目指す事業です。代表3機関(東北大学・本研究so・海洋研究開発機構)の連携のもと、全国の海洋研究者が結集していますが、中でも東大グループは20あまりの大学や研究機関から、200名を超える研究者と大学院生らが参画している大所帯です。

私たち事務局(総括班)は、この大家

族のグループ愛称を「プロジェクト・グループ」と名付けるところから始まりました。国際沿岸海洋研究センターのある大槌町で震災後に建造され、センターの調査船として活躍している「グランメーユ(* 大きな木槌の意)」にあやかっています。

これだけの大家族ですから、グループ間の調整や調査研究のために必要な事務・経理といった、運営そのものに関わる仕事はまず第一。それから、得られた成果を水産業の復興に役立てていくため、必要な情報の提供をするデータマネジメントに関わる仕事をしています。そして、なによりもこの班の一番大事な使命は、プロジェクトで行っている研究を一般の人々にわかり

やすく伝えることです。このため、パンフレット・小冊子などの配布物や展示物の制作、ホームページの運営、国際沿岸海洋研究センターと連携した大槌町でのさまざまな催しなどを行って来ました。

研究者と、サイエンスにあまりなじみのなかった職員が入り交じり、広報大使キャラクターのメーユちゃん・赤浜くん・グラン博士も加わって、にぎやかになってきました。これからさらに三陸沿岸地域の地元の方々や、全国、世界のみなさんへ情報発信していく予定ですので、よろしくお願ひします。

(畑瀬 英男、宮木 純子、渡部 寿賀子)



プロジェクト・グループのキャラクター



書き手自身による新刊紹介

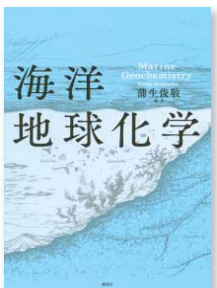


環境と微生物の事典

日本微生物生態学会 編
A5・448ページ・9,500円(税別)
2014年7月・朝倉書店 刊

本書は、「環境」をテーマに、生命誕生と微生物進化の歴史、病気の原因微生物

物と動植物や人間との関わり、微生物を利用した伝統食品づくりや環境浄化のしくみ、農林水産業と微生物との関わりなど幅広い内容を網羅しています。全体で約200の項目を挙げ、1~2ページで解説する形式なので、専門分野への導入として気軽に読むことができます。また、本書の表紙や裏表紙に描かれた素敵な絵は、本所研究員の吉澤晋氏の手によるものです。(浜崎 恒二)



海洋地球化学

浦生 俊敬 編・著
講談社(A5版)・270ページ
2014年7月発行・定価4,600円(税別)
ISBN 978-4-06-155237-1

海洋の化学的研究は近年めざましく進展しています。本書は、このような最先端の研究動向を取り入れつつ、海洋地球

化学を基礎から学べるよう工夫した教科書です。〈第1章〉地球システムの中の海洋、〈第2章〉海水とその化学組成、〈第3章〉海洋の炭酸物質と栄養塩、〈第4章〉微量元素と同位体、〈第5章〉海洋の有機地球化学、〈第6章〉海洋の水循環と化学トレーサー、〈第7章〉大気-海洋間の物質循環、〈第8章〉陸から海への物質輸送、〈第9章〉海底下地殻内流体の地球化学、〈第10章〉海底堆積物と古海洋学、〈第11章〉海洋地球化学の新しい展開に向けて。所内から植松先生に第7章を、また小畑先生に第2章を分担していただきました。(浦生 俊敬)